

## 序

本校の論集・第51集・2011をお届けさせていただきます。

2011年は誰にとっても忘れられない、忘れてはならない年になりました。本校では、帰宅困難生徒・教員の問題は生じたものの、おかげさまで実質的な被害はほとんどありませんでした。しかし、生徒たち一人一人の心の中に、それぞれの生徒なりの想いが刻み込まれた年であったと感じています。

本校は国立大学法人筑波大学の附属学校の一つとして、附属学校の中期目標として掲げられた「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」の3つをキーワードとして、種々の取り組みを行っております。附属学校としての大学との連携強化の継続はもちろんのこと、本校OBや筑波大学教員による社会貢献プロジェクト「筑駒アカデミア」も2007年より継続して開催し、一般向けの講演会と本校生徒による地域小学生向けワークショップなどで、地域貢献にも積極的に取り組んでまいりました。この中でも、今年度は震災や原発事故をテーマとした講演会なども開催いたしました。

また、2008年度に試行され、2009年度より本実施となりました「教員免許状更新講習」においても、幅広い講座を開講するとともに、「附属学校実践演習」による公開授業を毎年開催し、受講者の方々から高い評価をいただいております。

本校は2002年以来、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定されておりましたが、今年度をもって10年間の一区切りを終了いたします。後半5年間は「国際社会で活躍する科学者・技術者を育成する中高一貫カリキュラム研究と教材開発—中高大院の連携を生かしたサイエンスコミュニケーション能力育成の研究—」のテーマの下、全校・全教科一丸となって各種事業を展開してまいりました。特に、サイエンスコミュニケーション能力の育成に関しては、「学びあい・教えあい」をキーワードにして、中高の枠を超えた異学年合同授業や、高校生が小学生を教えるサマースクール、ワークショップなども行ってきました。国際交流でも、2008年度は北京師範大学附属学校へ、2009年度以降は台中第一高級中学校へ生徒を派遣し、密度の濃い交流を行っておりますが、今年は、国際交流の場でも、生徒たちが震災・原発問題を話題にした発表を行い、議論を深めたことが印象的でした。これも、SSHの中で、「科学者の社会的責任を考える」こともテーマの一つとしてきたことの表れではないかと感じております。

教員もまた、3.11をそれぞれに受け止めつつ、日々の教育活動の充実につとめてまいりました。本論集は、本校における教育研究・教育実践の成果を教科別にまとめたものです。これは、筑波大学附属学校の中期目標の一つである「先導的教育拠点」としての本校の位置づけにも大きく関わることです。本校の研究成果が、関係各位の教育活動のご参考になれば幸いに存じます。

本校及び関係各位の教育実践のより一層の充実をはかるため、本論集への忌憚のないご意見、ご批判、ご提言を賜りますようお願い申し上げます。

2012年3月

筑波大学附属駒場中・高等学校

校長 星野 貴行